



『一步一步進もう』

~Let's Move Forward Step by Step~
東京六本木ロータリークラブ会長

TOKYO ROPPONGI ROTARY CLUB

WEEKLY REPORT

東京六本木ロータリークラブ



『ロータリーは分かちあいの心』

~Rotary Shares~
国際ロータリークラブ会長

発行日 2008年6月30日

No. 40

平成20年6月16日

卓話『粋の正体』

伝統歌舞伎懇話会 会長・江戸勘亭流書道 家元

小山 觀翁 様

たまに和服を着ると必ず褒める人がいて粋ですねとおっしゃる。だけどそれはモードの方へ引っ張りすぎて、粋というのはもっと本質的なものじゃないかと思います。

一つの例ですが、若夫婦が婚姻届を出しに役所へいらした。ところが何故か二人の証人のうち一人の判がなかったので、窓口のお役人が受け付けるわけにいきませんと言う。若夫婦が、でも今日は吉日を選んで来たんですから何とかと言っても駄目。通りかかった課長補佐が見て、なるほど、これはちょっとまずいんじゃないでしょうか。で、しばらく考えて、お客様、勧めるわけじゃありませんけど地下の売店へ行ってみませんかと言って行ってしまう。血の巡りのいい夫婦は売店に飛んでいって三文判を捺して、めでたくOKになった。私は、この課長補佐のやったことが粋というものではないかと思うんです。最初、判がありませんから受け取れませんときちんと言いながら、「勧めるわけじゃないけれど下に売店がある」と言う。誠にすれすれの話。こんなもの実印はいらないんだから三文判を捺してお出しなさいと言ってしまえば、踏み外していることになる。このようにすれすれを行くけど本道を踏み外さず鮮やかに目的を遂げるというのが粋。じゃあ窓口の人は野暮か。野暮っていうと悪いことのようだけど、その立場にいる人が手続き不備のまま通してしまえば、本来の仕事を離れてしまうわけですから、野暮が世の中の基本です。判断能力、決定権のある人が初めて行使できる。

もう一つの例。皆様が深夜レストランに行ったら仲睦まじげに食事している男女の社員に遭ったとします。気付かれないように離れたところで食事して帰る方法もございますけど、人の上に立つ身としてあまり適当ではない。それで二人のところへ行って、やあとか何とか挨拶したあと、なる

べく離れたところに座つてあげるぐらいはしなきやなりません。さて食事が終わって皆様方どうなさるか。一つは、じゃ失敬と挨拶して帰るとき、レジで、あそこの分もねって言ってすっと帰っちゃう。もう一つ。「じゃお先へ失敬。あのね、君たちの分も払っておいたから」と言う。二人のムードはめちゃくちゃになります。何も言わずに勘定を払ってくれた上司に、部下は尊敬もするし感謝もする。これも粋ですね。もう少し踏み込んでレジの人が、先ほどの方のお申し付けでお部屋を用意してございます…。これは粋（行き）過ぎ。

粋という美学が始まったのは徳川八代將軍吉宗の頃。吉宗は、町民にも武士の儒学のような教育のテキストが必要だと考えておりました。清の道徳教本に六諭行義大意（りくゆえんぎたいい）というのがあり、これを手に入れた吉宗公は、そのうち日本の国民性にあった部分を室鳩巣に編集させ、寺子屋で教えることになりました。この六諭行義大意、結構には違いないけれど、まともに遵守すると肩が凝ってしまう。で町人たちは何とかこれをうまくすり抜けるよう工夫するようになりました。粋というのはすれすれのところを行きながら本道を踏み外さない、非常に巧妙な生き様だと思います。

粋は、誰もが簡単にできるものではありません。しくじるとただの粋がりになってしまいます。ですから人の上にお立ちになる方はよく考えて、お部屋まで用意するんじゃなくて、ちょっとしたところで心遣いをする。そういうものだとお考えあそばしては如何かと思うわけでございます。

